紫芳会だより　～輝く先輩達～

No.23
2014.7.1.発行

旭川医大図書館の貴重書室の前にて。
右から吉田晃敏学長（眼科学）、鮫島夏樹名誉教授（外科学）、図書館長の藤尾（筆者）。初代北海道医師会長の関場理堂（1865～1939）が収集した医学古文書1400点余りが、遠縁にあたる鮫島名誉教授から本学に寄贈された折の記念写真（2012年12月）。

国立大学法人旭川医科大学
理事　・　副学長　・　教授

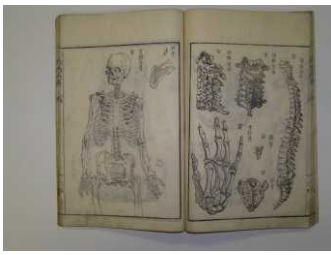
藤尾　均　氏　(高校25期)

立高25期（1973年3月卒業、当時の姓は近藤）。青梅市から通学。卒業後、早大文学部（哲学）・東大文学部（西洋古典学）卒業を経て東大大学院理学系研究科（科学史・科学基礎論）博士課程満期退学。順天堂大学医学部非常勤講師（医史学）などを経て、1998年、公募により旭川医科大学医学部教授に就任。長年、文科系の学問と医学との接点に位置する医療倫理・医療史・医療系文学などを講義。現在は理事・副学長・図書館長・入学センター長として大学の管理・運営にあたる。1999年に博士号（医学）を順天堂大より取得。

立高生のみなさん、はじめまして。25期、今年60歳の藤尾です。立高時代の私は、読書好きでやや陰気な、いわゆる「哲学少年」でした。好きな科目は2年次の目黒宏次先生の「倫理・社会」でした。当時の立高には自由選択科目として同じ目黒先生の「哲学」もあり、私としては願ったり叶ったりで、岩波文庫などに収められたプラトン・デカルト・カント・マルクスなどの哲学書を夢中でかじりまくる毎日でした。必修科目はあまり熱心に勉強した記憶がありません。当然ながら大学は文学部に進学しました。最初は早稲田に入りマスコミ関係に憧れましたが、性格的・体力的に無理だと悟ってからは大学教員に憧れるようになり、早大卒業後に東大に再入学し（文科Ⅲ類）、改めて基礎から学び直しました。

寄贈書より。山脇東洋(1706～1762)による日本初のオリジナルな人体解剖書『蔵志』(1759年)。

人文系の学問の3本柱は哲学・文学・歴史学ですが、私はこの両大学で通算8年、さらに東大大学院で通算8年、この3領域を浅く広く学びました。何の資格も免許もないので就職には苦労しましたが、43歳のとき旭川医大に教授として奉職できました。文学部卒でありながら医学部スタッフになれたのは、生物学系の基礎知識も持ち合わせていたこと（立高時代のクラブは生物部でしたし、大学院は理学系研究科でした）が評価されたためだったようです。



寄贈書より。杉田玄白(1733～1817)らによりオランダ語から翻訳された解剖書『解体新書』(1774年)。

ひとくちに大学といっても、文学部と医学部とでは文化が全く違います。文学部はほとんどの授業が選択科目で、学生は好きな科目や教員を自由に選択し好きなことに打ち込みます、その代わり、卒業しても何の免許も得られません。卒業後の進路もさまざまです。医学部はほとんどが必修科目です。しかも、教わる内容は文科省によって明確に決められています。学生は医師・看護師免許取得をめざして努力し、卒業後はほぼ全員が医療職につきます。

旭川医大は日本最北の国立大学で、医学部だけの単科大学です。入学定員（編入学生を除く）はここ数年、医学科（6年制）112名、看護学科（4年制）60名で、新入生から最終学年生、さらに大学院生までを合わせても1000名ほどの小さな大学ですが、専任教員は300名もいます。ですから、教員一人当たりの学生数は3.5人にも満たず、授業はいわゆるマンモス私大のマスプロ講義などとは全く違います。学生と教員がアットホームな雰囲気で接し、江戸時代の寺子屋のような理想的な教育環境が実現できています。無理・無駄・斑（むら）のないカリキュラムが設けられ、そのため学生のほとんどは、勉強ばかりでなく、66種類もあるクラブ・サークル活動のいずれかにも熱心に取り組んでいます。卒業後は大半が北海道をはじめ全国各地の地域医療に貢献しています。

寄贈書より。全身麻酔による乳がん摘出に世界で初めて成功した華岡青洲(1760～1835)の業績を弟子が筆写した写本(1805年頃)。

旭川医大は昨年、開学40周年を迎えましたが、残念ながら立高の卒業生はまだ誰も入学していません。国立大学なので学費は安価です。国家試験合格率は上位を誇っていますが、入学難易度は決して高くありません。このような、さまざまな「お得」感のある旭川医大を、あなたも目指してみませんか。いくら私が入学センター長だからといって、立高からの受験生に格別の便宜を図るわけにはいきませんが、合格したあかつきには、私が誠心誠意、家族の一員のように面倒をみて差し上げます。札幌に次ぐ北海道第二の都市である旭川は、大地が広大で四季の変化にメリハリがあり、物価は安く、夏場は本州のように高温多湿ではなく、冬場の雪はサラサラで軽く、美瑛・富良野などの行楽地にも近く、じつに住みやすいまちです。私自身、この地に就職できた幸運に深く感謝しています。みなさん、私といっしょに旭川で医学・看護学を学びませんか。